

■ 編集だより

編集後記

忙中閑あり、医局の書架の海外雑誌を開いてみる。American Journal of Psychiatry の最近の号（2015 年 8 号）の commentary と introspection が目についた。

Commentary の 1 つは「倫理、尋問と米国精神医学会（APA）」というタイトルで、Summergrad 氏（2015 年 APA 会長）と Sharfstein 氏（2005 年 APA 会長）との連名の投稿だ。それによると、2005 年のこと、Sharfstein 会長、米国心理学会会長、米国公衆衛生局長官、軍医総監を含む関係者が国防省スタッフとともに、今では悪名高いグアンタナモ捕虜収容所を視察したのだそうだ。その晩の会議において、Sharfstein 会長は捕虜尋問への協力を断った。ところが米国心理学会は国家安全のためなら協力を許容する立場を当時は取っていたらしい。そのため、心理学者は協力するのになぜ精神科医はしないのかと詰め寄られたが、治療技能を尋問に応用するのは倫理に反すると撥ね退けたというのである。まもなく APA は、拘留下にある人物の尋問に精神科医は協力しないという公式声明を発表し、米国医学会と英国精神医学会がこれにならった。この連名の commentary は、ブッシュ政権時代の心理学者の尋問協力疑義を述べたニューヨークタイムズ紙の 2015 年の記事に触発されているが、深読みすれば、昨今の国際情勢を憂慮して、このエポックを再提示しておきたかったのかもしれない。

いま 1 つの commentary は「患者に背を向けるのか？ 電子カルテ時代の精神科修練」というタイトルの Rasminsky 氏ほか 2 名からの投稿だ。米国では、Health Information Technology for Economic and Clinical Health Act of 2009 なる法律が制定され、2014 年までに電子カルテ化を進めないと診療報酬上不利になることに決まっていたらしい。この流れのなかで、画面上に正確な記録を残すことに集中するあまり、研修医が視線を患者に向けなくなっている事実と、そのための弊害が具体的に述べられ、文末は William Osler の有名な言葉“Listen to your patient, he is telling you the diagnosis”を引用して締めくくられている。研修医教育の観点から電子カルテの落とし穴を論じている点が新味だろう。わが勤務先でも 2015 年から院外紹介状もスキャンされるようになって紙カルテが完全に消滅した。紙カルテを知らない世代がやがて出現してくる。

Introspections 欄には、Andreasen 名誉編集長の「John and Alicia Nash: A Beautiful Love Story」が掲載されている。上述の commentary には受理日が記されているので編集委員会の審査があったようだが、こちらには受理日の記載はない。特別寄稿というところだろう。2015 年に交通事故で共に亡くなったノーベル経済学賞受賞者 John Nash と妻の Alicia への追悼文であり、John の統合失調症からのリハビリを綴った文章でもある。そのリハビリは抗精神病薬を要せず、専門家のサポートを求めず、ただ Alicia の献身に支えられていた。Alicia は一度は離婚したものの、まもなく同居を再開し、やがて正式に再婚して John を支え続ける。Alicia なくして John の生涯はなく、むしろノーベル賞受賞もなかった。受賞時には専門家にはまだ明らかに見てとれた残遺症状は、窮乏から脱却し生活の幅が広がるとともにさらに改善し、晩年にはかろうじて気付く程度であったという。仲睦まじい老夫婦があと先なく共に人生を閉じるのは幸せだとも述べている。こうして二人の人生は完結した。しかし、父の名を譲り受け、同じく数学を学び、そして同じく統合失調症を発症した一人息子の Johnny は残された。余韻の残る一文である。

3 編はいずれも 2～3 ページ程度の比較的短い文章だ。Andreasen 名誉編集長の追悼文は別格かもしれないが、紹介した commentary のような内容は、本誌ならば「討論」や「会員の声」に該当するだろう。しかし、2015 年の本誌を繰ってみると「討論」と「会員の声」の掲載は、わずかに 1 編ずつに留まる。多士済々の本学会だ。もっとこれらの欄が利用され、本誌上で討論が湧き上がり、会員の声が交換されるとよいと思った。

大森哲郎